

ドイツ自由主義神学におけるカーライル

小 柳 敦 史

1. はじめに

— ドイツ自由主義神学におけるカーライルの流行

過去の思想家たちのテキストのなかで、そのテキストが書かれた当時には広く読まれていたことが窺えるが、今日ではなぜそれほど重要視されていたのかが分からなくなってしまう著者や著作の名前に出会うことがある。スコットランドに生まれ、ロンドンでも活躍した著作家 T. カーライル (1795–1881) もまた、そのような著者の一人であると言って良いだろう。カーライルの思想は、内村鑑三⁽¹⁾、新渡戸稲造⁽²⁾ など、日本でも多くの読者を獲得したことが知られている。そしてまた、同時期のドイツの自由主義神学者たちも、カーライルを読み、神学的な議論に組み込んでいた。その流行を示す例として、1909–1913 年出版の事典『歴史と現代における宗教』第 1 版 (RGG¹) に、9 段にわたる「カーライル」の項目記事⁽³⁾ が含まれていることが挙げられる。これは、ダンテの 4 段を大きく超え、ゲーテの 10 段に匹敵する分量である (ちなみに、シェイクスピアについては「〈文学史〉を見よ」と参照指示があるのみで、独立した項目は立てられていない)。ここには、カーライルがこの時代のドイツの自由主義神学にとって重要な存在であったことが表れている。そこで本稿では、数人の代表的な神学者のテキストを通して、ドイツの自由主義神学者たちがどのようにカーライルを受容したのかを明らかにしたい。

以下ではまず、議論の前提となるカーライルの著作においてキリスト教が

どのように取り扱われているか概観する。その次に予備的な作業として、自由主義神学の代表的著作の一冊である、A.v. ハルナックの『キリスト教の本質』にもカーライルの影響が見られることを確認する。その後、集中したカーライル論を著している新約聖書学者 W. ブゼットと実践神学者 O. バウムガルテンのカーライル解釈を分析する。最後に、ハルナックやバウムガルテン、ブゼットと親しい関係にありながらも、カーライルに対して一定の距離を取っていたように見える E. トレルチの議論に目を向け、トレルチとカーライルの思想的距離について考察する。

2. カーライルとキリスト教

カーライルは、ジョン・ノックスの宗教的理念を受け継いでスコットランド教会から独立していたバーガー分離派教会の熱心な信徒の家庭に生まれ育ち、カーライルが学んだグラマー・スクールもバーガー分離派教会の学校であった⁽⁴⁾。グラマー・スクール卒業後、エディンバラ大学に進学し、両親の期待通りにいったんは神学部——これはスコットランド教会の管理下であった——に在籍するものの、数年のうちに聖職者への道を断念する。この判断の明確な理由は不明だが、スコットランド啓蒙の中心地であるエディンバラでの学生生活により与えられた知的刺激と、制度化された教会の現実への幻滅により、「自らが既成の教会の構成員になることを潔しとせず、それを批判の対象としてとらえるほかはなかった」⁽⁵⁾ということなのだろう。宗教やキリスト教の意義は認めつつ、教会を厳しく批判する姿勢を、カーライルの多くの著作で確認することができる。

内村鑑三が高く評価するクロムウェル伝など、カーライルがキリスト教について言及する著作は数多い。そのすべてを網羅的に紹介することはできないので、ここではドイツの自由主義神学者たちによるカーライル受容の中心となった二つの著作、すなわち『サーター・レサータス』⁽⁶⁾と『英雄と英雄崇拜』におけるキリスト教に関する議論を確認する。

1836年にアメリカで初版が出版された『サーター・レサータス』は、ドイ

ツ人大学教授ディオゲネス・トイフェルスドレックから送られてきた原稿を、イギリス人編集者である「私」が紹介するという体裁を取る作品である。トイフェルスドレックの人物像には多分にカーライルの自伝的要素が含まれており、「私」による皮肉を交えて紹介されるトイフェルスドレックの原稿は、カーライルの思想を自己反省と自己諧謔を伴いつつ提示するものとなっている。

本書で提示されるトイフェルスドレック≡カーライルの思想が、社会的制度のみならず社会で用いられる象徴も「衣装」のように本質的なものを覆う一時的な形態に過ぎず、時間の経過とともに古くなるという〈衣装の哲学〉である。この思想において、キリスト教の教会制度や教義も歴史において変化していく一時的な流行であると理解され、「教会衣装 (Church-Clothes)」という言葉が与えられる。「教会衣装とは、我々の語彙でいえば、人々がさまざまな時代において、宗教的原理を自分たちのために体现し、表象してきた形式、すなわち、着物 (Vestures) である」⁽⁷⁾。社会の存続にとって「教会衣装」は必要不可欠なものであり、その最高の頂点かつその後の展開の源泉はイエスによって与えられたという。

もしあなたが、人間はこのようなやり方で象徴をいかなる高みへともたらしめたかと問うならば、我々の最も神聖な象徴、つまり、ナザレのイエスと、その人生と、その伝記と、そこから続いて生じたことを見よ。人間の思想はそれ以上に高いところへと到達したことはない。これがキリスト教であり、キリスト教世界、すなわちまったく永続的で無限の性格の象徴である。その意義は常に、新たに探求され、新たに明瞭にされることを要求するだろう⁽⁸⁾。

しかしながら、カーライルは自分と同時代の「教会衣装」に対して、すでに古ぼけており、イエスによってもたらされた真理が抜け落ちていると苛烈な批判を展開する。

我々の時代の世界においては、その同じ教会衣装は痛ましいまでに肘

が擦り切れてしまった。いや、もっと悪い。教会衣装の多くは、ただ空虚な外形または仮面となった。その内側には、生きた人間や精神はもはや宿っておらず、ただ蜘蛛や汚い甲虫が、ぞっとするほど沢山集まって、その営みに精を出している⁽⁹⁾。

このように、『サター・レサータス』には、宗教あるいはキリスト教の意義を認め、イエスの生涯と言動に対しても肯定的な評価を与えるが、既存の教会には否定的な態度を取るという、キリスト教批判の一つのパターンが明瞭に認められる。この視点から見ると、本来の宗教性を失ってしまった制度的教会に生き生きとした宗教的情熱を吹き込もうとした働きは高く評価されることになる。そのような例として、ジョージ・フォックスに最大級の賛辞が送られていることも、『サター・レサータス』の特徴である⁽¹⁰⁾。

古くなり形骸化した社会的「衣装」が刷新される時に生じる事態として『サター・レサータス』において論じられた〈英雄崇拜〉というモチーフを、カーライルが集中的に論じた著作が『英雄と英雄崇拜』である。1840年に連続講演で語られた内容がまとめられ、1841年に出版された。「こうした偉大な人々は、一般大衆がどうにかできたことや達成できたことの原案作成者であり、手本であり、広い意味での創造者であった」⁽¹¹⁾ という冒頭で示される歴史認識に基づき、英雄＝偉人と一般大衆との関係の原理と歴史的展開が主題となっている。英雄は「誠実さ」という共通の要素を持っており、それが歴史の諸段階においていくつかの特徴的な形態をとって現れるものとされる。

『英雄と英雄崇拜』で具体的に論じられるのは、「神としての英雄」がオーディン、「預言者としての英雄」がムハンマド、「詩人としての英雄」がダンテとシェイクスピア、「牧師としての英雄」がルターとノックス、「文人としての英雄」がサミュエル・ジョンソン、ルソー、ロバート・バーンズ、「王としての英雄」がクロムウェル、ナポレオンである。『サター・レサータス』では英雄的存在の代表として扱われていたイエスとゲーテの名前がないことや、「神としての英雄」や「預言者としての英雄」においてあえて非キリスト

教的対象が論じられていることが意外な印象を与える一方で、ルターとノックスが「牧師としての英雄」の例として挙げられることには、カーライルの宗教的背景がはっきりと現れている。

本稿の関心に照らすと、カーライルが〈英雄崇拜〉とプロテスタンティズムに積極的な関係を見出していることは注目に値する。プロテスタンティズムは精神的な権威を否定する運動であり、〈英雄崇拜〉を破壊するものであるように理解されうえることをカーライルは意識しており、その見方を否定しない⁽¹²⁾。外的な精神的権威に反抗し、「個人的判断」の意義を時代に先駆けて示したことがルターの業績である。それは、ルターに続く者たちの「誠実さ」を呼び起こし、それぞれの「個人的判断」を可能にするものであった。「人は他人から受取ったものを、最も純粋な意味で信じ、さらに自分自身のものとしてすることができる」⁽¹³⁾ のであって、ルターへと向けられる英雄崇拜は「個人的判断」を旨とするプロテスタンティズムと矛盾するものではない。カーライルは次のように述べる。

プロテスタンティズム始まって以来の、この激しい革命的な仕事のうちに、私はこの上なく祝福されるべき結果が準備されているのを見る。それは、英雄崇拜の廃止ではなく、むしろ、私が英雄ばかりの世界と呼びたいものである。もしも英雄が誠実な人を意味するなら、どうして我々一人一人の全員が英雄になれないことがあろうか⁽¹⁴⁾。

このようにカーライルにおいては、〈英雄崇拜〉がプロテスタンティズムの基盤に位置付けられるのみならず、一般大衆もまた英雄になりうるという〈英雄崇拜〉の新たな局面が、プロテスタンティズムによって与えられたとされている。崇拜される英雄と崇拜する一般大衆の間に連続性を認めるこの議論は、〈英雄崇拜〉とプロテスタンティズムとの結びつきの焦点に位置するものでありながら、以下で見ていくドイツの自由主義神学におけるカーライル受容においては十分に注意を払われていなかったように思われる。

3. ハルナック『キリスト教の本質』におけるカーライル

ここからは、ドイツの自由主義神学者たちがカーライルの思想をどのように読み、どのような評価を与えていたのかを見ていく。その最初の事例として、A.v. ハルナックが1900年に出版した『キリスト教の本質』を取り上げたい。『キリスト教の本質』が、ドイツの自由主義神学を代表する書物の一つであることは、衆目の一致するところであろう。ハルナックは『キリスト教の本質』の冒頭部と結末部という議論全体の論調を左右する箇所において、カーライルの『サーター・レサータス』を引用している。

まず、ハルナックは『キリスト教の本質』第1講の冒頭近くで次のように述べる。

60年前にカーライルは以下のように書いている。「この荒んだ時代には、宗教的な原理が主要な教会から放逐され、善き人の心の中で密かに新たな啓示を待望したり妨害したりするか、身体のない魂のように、そうした啓示の地上における組織を求めている。そのような時代において宗教的原理は、試験的・過渡的に、多くのとても奇妙な迷信や狂信の形式で装う。人間本性のより高次の熱狂は一時期の間はそれを示す記号を持たないが、破壊されることなく、倦むことなく作用し、カオス的な大いなる深みの中で盲目的に働く。そのようにして、分派が次から次へと、教会が次から次へと成立しては、再び新たな変容へと融解していく」⁽¹⁵⁾。

このように、現代ドイツの宗教問題を先取りするような時代診断を下しているものとして、カーライルの『サーター・レサータス』の一節⁽¹⁶⁾が紹介されている。ここから、ハルナックは「キリスト教の本質」は何か、という本題へと議論を絞り込んでいく。

『キリスト教の本質』最終第16講の終わり近くに再び——ここではカーライルの名前は明示されないが——、『サーター・レサータス』からの引用が確認できる。

しかし福音はだからといって沈み行くことはないだろう。このことを歴史が証明している。福音は、織物の内側の赤い糸のように、常に発見されるだろうし、どこかで改めて姿を現し、もつれた結び目から解き放たれるだろう。外的には装飾され、内的には腐敗したギリシア教会とローマ教会の寺院の中でさえ、福音は消えていない。「勇気を出して進め！ 丸天井の下に、祭壇と、その神聖なる、永遠に燃える灯を見出さるう」⁽¹⁷⁾。

最後の一文が『サター・レサータス』からの引用である。ここでは、墮落した（とハルナックがみなす）キリスト教の歴史的形態の中でも変わらない核心の存在が、カーライルを援用して主張されている。このようにカーライルからの二つの引用を並べてみると、ハルナックはカーライルの言葉によって、現代のキリスト教の危機はイエスの福音からキリスト教が乖離してしまった頽落の帰結であるが、イエスの福音そのものの永遠的な意義は失われていないという、『キリスト教の本質』の基調をなす主題を語らせていることがわかる。カーライルはハルナックにとって、キリスト教史についての基本的見解を共にする存在として名前を挙げるべき、知的権威の一人であったと言ってよい。実際、加納和寛の紹介するところでは、ハルナックは盟友 M. ラーデに宛てた手紙の中で、歴史的生を豊かにしてくれるような人格の持ち主としてアウグスティヌス、ルター、ゲーテ、カーライルの四人を挙げているという⁽¹⁸⁾。

このように深く尊敬するカーライルからハルナックが学んだのは、キリスト教史の理解というよりも、歴史というものについての見方というより根本的なものであったようである。加納はハルナックの歴史観について以下のよう

ハルナックは基本的にリッチェルの線に立ちつつも、リッチェルの目的論的歴史観を斥ける。ハルナックが用いたのは、T.カーライル（Thomas Carlyle, 1795-1881）の刺激を受けた、帰納的な存在論的歴史観である。カーライルにとって歴史とは、英雄の人格から帰納される結

果であり、ヘーゲルの歴史哲学に真っ向から対峙する。したがってイエスの人格もまた歴史の動因であるということになる。ただし、ハルナックはこの点を独自に解釈し、人格の価値は歴史から帰納されるとする。この主客の転倒にもかかわらず、存在論的歴史観そのものに関してはハルナックは明白にカーライルと軌を一にする⁽¹⁹⁾。

通常、ハルナックはリッチェル学派を代表する神学者として扱われるが、ここでは、カーライルを補助線として、ハルナックとリッチェルの歴史観の相違が浮き彫りにされている。ここから、カーライルの受容の仕方が、神学者相互の布置連関を描き出すための補助線になることが示唆される。

ハルナックにおけるカーライルの歴史観の受容については、それがいつ・どのように始まり、ハルナックの著作にどのような影響を与えたのか、また、カーライルの歴史観からもたらされる帰結の一つである〈英雄崇拜〉に対するハルナックの評価はいかなるものなのか、といった問いも興味深い主題であるが、ここではこれ以上論じることはいできない。本稿は、ハルナックの例から得た、カーライルの受容の仕方に神学者の特徴が現れるという見通しをもとに、まとまったカーライル論を著した二人の神学者についての考察へと移りたい。

4. W. ブセットのカーライル論

宗教史学派の代表者の一人と目される新約学者 W. ブセットは、「生涯を通じて、イギリスの作家で歴史家のトマス・カーライルを尊敬していた」⁽²⁰⁾とされている。そのブセットは、1897年に自由主義神学の論壇である『キリスト教世界』(*Die Christliche Welt*)にカーライル論を連載した⁽²¹⁾。この内容を確認したい。

ブセットは、「カーライルの著作が正しく読まれるならば、それは道徳の鉄泉浴のように作用するに違いない。カーライルの著作は意志を刷新し、エネルギーを呼び起こす」⁽²²⁾と述べ、非常に高い評価を与える。このような道徳

的刷新力を持ったカーライルは、ブセットにとって「預言者」、特に旧約聖書の預言者たちと重ねて理解すべき存在であった⁽²³⁾。

カーライルの知的ルーツについては、以下のように述べる。まず一点目は、「カーライルはスコットランドのピューリタニズム、すなわち、福音主義的キリスト教の、あの活力あり、歴史的な影響を及ぼしてきた、英雄的な形態の出自である」⁽²⁴⁾ ということである。確かにカーライルはピューリタンの家庭の出身であり、一時は神学を志していたことは、私たちも確認した通りである。

しかし、機械化と物質主義の進む近代社会における人間の生き方を考えようとするカーライルに、当時の神学の勉強は解決を与えなかった。そこでカーライルが出合ったのが、ドイツの哲学と文学だった。ブセットはこのことを以下のように記す。

しかしながら、解決の瞬間が来た。すでに彼にも解放の力が及んでいたのだ。我々は誇りを持ってこのことに言及したい。カーライルの生を祝福し、癒した力は、ドイツの観念論哲学とドイツ文学である。とりわけ、フィヒテとゲーテがカーライルの精神的展開を規定した⁽²⁵⁾。

このような、カーライルの持つキリスト教性とドイツ性の強調は、他の神学者たちの議論においても繰り返される。ドイツの思想と文学のアクチュアリティを、イギリス（スコットランド）の作家という他者の目を通して確認できたことは、この時代のドイツにおける積極的なカーライル受容の一因だったと思われる。

では、ブセットがカーライルの思想の内容として評価するのはどこなのだろうか。ブセットは「おそらく我々にとって最も興味深く、最も重要なもの」⁽²⁶⁾ として、カーライルの歴史哲学、特に『英雄と英雄崇拜』の内容を挙げる。その要点は以下のように理解される。

そういうわけで、まさしく一人一人の個人の本質的な差異が、すべての人間の歴史的な共同体的生の展開にとって必然的である。機械論的な

生成の方法でこれは成し遂げられない。根本的な推進力は、外部からは決して生成されず、常に内的に発展していく人格の神秘であり、より自由に発達するほどに価値が増し、力強いものとなる個性の神秘である。すなわち、常に繰り返され、常に新たに生まれる神の奇跡のわざの神秘である。そこで、すべての進歩、つまりすべての歴史的な生は、偉大な人格、すなわち指導者と英雄から生まれてくる⁽²⁷⁾。

ブセットの理解では、カーライルにおいて、歴史を動かす推進力は個々人の内面に存在するが、それは万人に平等に分ち持たれているわけではない。歴史を動かすほどの力を持つのはごく一部の限られた人間であり、それは神による奇跡の働きである。言い方を変えると、神は英雄的な人間を通して歴史に働きかける。英雄ではない大衆 *Masse* は、英雄を崇拜＝信仰し、英雄が示す方向へと社会を動かすべく、英雄の周囲に共同体を形成する。したがって、「相関的な共同体における人間の間を支配する根本的な関係は、英雄と英雄崇拜である」⁽²⁸⁾とまとめられる。カーライルの英雄崇拜論を好意的に紹介するブセットは、この歴史観を自らの思想の一部としている。ただし、このブセットの解釈では、カーライルにおいては認められた、英雄を崇拜する大衆の一人一人もまた英雄になりうるという考えは姿を消し、英雄と大衆の質的差異が強調されることとなっている。

ブセットは以上のようにカーライルの〈英雄崇拜〉を理解した上で、それを彼の生きる時代のドイツの社会状況に対する診断に援用する。ブセットは次のような時代診断を示す。

私たちの社会はその新しい形態をまだ見つけていない。私たちの社会はそれを見出そうともがいているのだが。そして、形態とともに、形態の下に隠されていた内容も失われようとしている。すなわち、教会と教会的信仰とともに、万有の根拠と神は「もしかしたら」になってしまい、人間社会の形態とともに、人間と人間の間の古くからの深く神聖な関係も失われてしまった⁽²⁹⁾。

ここでは、伝統的な社会形態や教会を中心にした信仰形態の喪失により、神への信仰やそれに基づいた人間相互の関係が見失われることへの危機感が提示されている。ブセットはこの状況からドイツ社会を救うために、キリスト教精神に基づいて労働運動を活性化させることのできる指導者が必要だと考えており、具体的にはF. ナウマンに期待をかけていた。「ブセットはフリードリヒ・ナウマンに、労働者大衆をより良い生活へと導くにふさわしい指導者を認めた」⁽³⁰⁾ のである。

なお、「形態とともに、形態の下に隠されていた内容も失われる」という記述は、カーライルの英雄崇拜論の前提となっている〈衣装の哲学〉と整合性のある議論となっているかどうかは慎重な考察を要するように思われる。なぜなら、〈衣装の哲学〉においては、歴史的制約を受けて時代とともに変わりゆく外面的な現れと、その核にある不変の精神的原理の関係が問われているからである。内容が失われることについての訴えは、19世紀前半のスコットランドとイングランドを見ていたカーライルよりも、19世紀末のドイツに生きるブセットが、社会における宗教性の喪失に対する危機感を切迫したものと受け止めていたことの現れなのかもしれない。いずれにせよ、ブセットは〈衣装の哲学〉にはあまり関心を払わず、英雄崇拜論をカーライル思想の偉大な内容として重視している。

ブセットにおけるカーライルの英雄崇拜論の受容が、彼の新約聖書研究にも決定的な影響を与えた可能性が指摘されている。ブセットは「キュリオス(主)」という称号の解釈にあたって、「ここで問題となるのは、高举のキリストとのそれぞれの個人的な関係ではなく、祭儀のなかで御名をこのように呼びかける会衆である」⁽³¹⁾ と述べ、キリスト教の成立において、「キュリオス」に対する祭儀を中心とした共同体形成が果たした役割を重視する。この見解について、「カーライルの〈英雄崇拜〉(hero-worship) が、W. ブセットにおいてキリスト論に移入されるとその時、祭儀の対象としての神人(Kultheros)イエスの祭儀的崇拜になる」⁽³²⁾ との解釈が示されている。『キュリオス・クリストス』という著作ではカーライルの名前は明示されておらず、本書におけるブセットの発想の源を特定することは困難である。そしてまた、すでに

確認した通り、カーライルの『英雄と英雄崇拜』において、イエスは英雄の例として取り上げられているわけではない。しかし、プセツの積極的なカーライル受容を念頭に置くと、『キュリオス・クリストス』におけるキリスト論の着想の源の一つとして、カーライルの英雄崇拜論を想定することは十分に可能であるように思われる。

5. O. バウムガルテンのカーライル論

RGG 第1版の「カーライル」の項目を執筆したのが実践神学者 O. バウムガルテンである。バウムガルテンは、M. ヴェーバーの親戚であり、親しい交友があったことはよく知られている。ハルナックやラーデなど、いわゆるリッチェル学派のメンバーとも、そして、トレルチなど宗教史学派のメンバーとも親交があったが、この時代の自由主義神学を二分する陣営のどちらにも与しなかった。それでも、1911年から1925年にはハルナックの後任として福音主義社会協議会の議長を務めるなど、時代を代表する神学者の一人と目されていた。また、1926年の著作『十字と鉤十字』(*Kreuz und Hakenkreuz*)⁽³³⁾において、いち早くナチズムの反ユダヤ主義に警鐘を鳴らした神学者でもある。バウムガルテンは1906年に著書『カーライルとゲーテ』⁽³⁴⁾を出版し、その成果を元に RGG 第1版の「カーライル」の項目記事を執筆した。さらに、RGG 第2版にはそれを2段に圧縮した項目記事⁽³⁵⁾が収録された。

バウムガルテンもカーライルの著作の中から『サーター・レサータス』と『英雄と英雄崇拜』を主たる議論の対象とする。ただし、『英雄と英雄崇拜』は「カーライルの天才の最も完全な業績」ではあるものの、「3冊目の著作『サーター・レサータス』に個別に見出される思想の糸を撚り合わせたものにすぎない」と述べ⁽³⁶⁾、『英雄と英雄崇拜』よりも『サーター・レサータス』を重視する。そして、「社会の再生は、新たな教会衣装 (Kirchenkleider) を手に入れることにかかっている」⁽³⁷⁾と述べ、『サーター・レサータス』の用語を用いながら、自らの問題関心を表明する。

カーライルに基づけば、「衣装」として変化するのは「教会」のような外的

な装いだけではない。内的な考え方にも、時代とともに変化する部分がある。そのように変化する価値観や考え方もある、一種の「衣装」である。「そのようにしてカーライルは再び、宗教的な見解という衣装だけが変化するのであり、その本質はまったく変わることはない、なぜならそれは我々の最も内的な道徳の本質に深く根ざしているからだ、と強調する」⁽³⁸⁾ とバウムガルテンはまとめる。

最内奥に位置する変わらない本質と、その周囲の「衣装」が区別されるからといって、その両者は無関係なわけではない。本質は裸では存在できず、常に「衣装」を必要とし、「衣装」を形成する力を持つ。それゆえ、歴史とは新たな「衣装」が形成され、着替えられていく過程であると理解される。バウムガルテンは次のように述べる。

決定的なことは、外的かつ奇跡的に啓示され完成した神の世界としてではなく、純粹に内的なものであり、歴史的に生成してきて、さらに歴史的に展開してゆく精神的な力としてのキリスト教の把握を、私たちが実行することである。そのような精神的な力の価値と尊厳は、永遠に固定された、非人格的な教説に基づいているわけでは決してなく、私たちの生を形作る聖なる力に対する畏敬によって人格が満たされることにのみ基づいている⁽³⁹⁾。

バウムガルテンは、歴史の中で様々な「衣装」を展開する精神的な力としてキリスト教を理解するよう主張する。それは、単なる理解ではなく、歴史の原動力である精神的な力＝キリスト教が新たな衣装を身につけるプロセスに参加することである。そのために「古くなった考え方の衣装を振り落とし」⁽⁴⁰⁾、「公式の教会衣装を気にすることなく」⁽⁴¹⁾、新たな衣装の形成を目指すべきだとされる。

新たな衣装を形成するにあたってバウムガルテンが提示するのが、英雄としてのイエスの存在である。すでに確認したように『英雄と英雄崇拜』でイエスは取り上げられていないが、イエスについての『サター・レサータス』の記述を見ると、カーライルはイエスを最高の英雄として評価していると判

断して良いように思える。それなら、なぜ『英雄と英雄崇拜』でイエスが扱われていないのだろうか。バウムガルテンは、イエスの省略は意図的なものであって、カーライルの「敬虔さとカルヴァン主義的教育」による「遠慮」によるものだと判断する⁽⁴²⁾。そうであるなら、イエスを英雄として崇拜することは不当ではない。ここからバウムガルテンは以下のように結論する。

そういうわけで、我々はカーライルの歴史観から安んじて帰結を導き出し、聖なる、しかしながら人間的＝自然的なイエスを、神の啓示の最高の象徴として同時代人たちに提示しよう。我々は落ち着いて、永遠なるものの最高度の予感としてイエスに息づいているものをすべて取り入れよう、そして、疎外された同時代人たちをイエスを通じて神へと導くために、英雄崇拜の絶えることない衝動を用いよう⁽⁴³⁾。

イエスを英雄崇拜の対象として提示する点は、バウムガルテンとブセットに共通している。しかし、バウムガルテンの主張はブセットとは異なり、独自の新約聖書研究から導き出されたものではなく、カーライルの議論の内在的な解釈に基づいている。また、内容面においても違いがある。ブセットが「イエスは原始教団にとって英雄であった」と考えたのに対して、バウムガルテンは「イエスは現代のキリスト者にとっても英雄である」と考え、イエスに対する〈英雄崇拜〉に基づくキリスト教的共同体＝新たなキリスト教的衣装の形成を目指した⁽⁴⁴⁾。一方、ブセットがナウマンをそう見なしたような、現代における特定の個人を「英雄」として期待する発想は、バウムガルテンのカーライル論に少なくとも明示的には認められない。

6. E. トレルチにおけるカーライル

ドイツの自由主義神学者の中で最も深く歴史の問題に取り組んだのは、E. トレルチだったと言って良いだろう。このトレルチはカーライルに対してどのような態度を取っていたのだろうか。トレルチはブセットとともに過ごした学生時代を振り返り、「ロマン主義者やフィヒテやカーライルを耽読し

た」⁽⁴⁵⁾と述べている。そして、初期の論文から晩年の『歴史主義とその諸問題』まで、カーライルの名前はトレルチの著作に散見される。本稿で確認したブセットとバウムガルテンのカーライル論も参考文献に挙げられている⁽⁴⁶⁾ので、周囲の神学者たちがカーライルを積極的に評価していることも知っていたものと思われる。

しかしながらトレルチはブセットやバウムガルテンとは異なり、カーライルに対する共感を直接的に示すことはない。トレルチの著作においてカーライルの名前は、19世紀の精神状況を説明するための具体例の一つとして現れる。『社会教説』では、スピリチュアリズムスについての議論の中でカーライルへの言及がある。

このロマン主義的宗教性に、すなわち、芸術の分化と哲学の内在思想と結びついたスピリチュアリズムスに、教養層の近代のドイツ人がプロテスタントから手に入れることのできるもの、すなわち、宗教一般についての理解が根ざしている。それは教養人の秘密の宗教である。(中略) アングロサクソンやカルヴィニズムの地盤の上では、そのようなスピリチュアリズムスははるかにわずかな理解にしか出会わなかった。つまり、スピリチュアリズムスは非実践的、非社会的、非教會的、非倫理的だと思われたのである。しかしながら、エマーソンのサークルの著作と——非常に活動的＝倫理的であり、審美主義に対立しているという意味で——カーライルの著作によって当地でも遙か以前からこの道は歩まれていた。すなわち、あらゆる歴史的なものは一つの象徴である。どこでも自らを認識し、特別な力を備えた英雄からのみ流れ出てくる理念は、あらゆる形態の下にあって永遠なのだ⁽⁴⁷⁾。

ここでカーライルはアングロサクソン世界においてスピリチュアリズムスを体現した人物として取り上げられている。その記述はあくまで客観的な宗教社会学的分析であり、トレルチの立場が示されているものではない。しかしながら、トレルチにおいてスピリチュアリズムスが近代の宗教性の基調をなすものと理解されており、トレルチ自身もスピリチュアリズムスに親近感

を抱いていたことを念頭に置くと、上記の『社会教説』における記述は、トレルチがカーライルを宗教的立場において自らと親和性の高い人物だと理解していたことの間接的な表現だとみなすことができる。

『社会教説』と同時期に執筆された論考「19世紀」では、「社会主義的文化批判」の例としてカーライルの名前が挙がる。広い意味での「社会主義」の中には、「精神的な指導者と組織家の指導の下で理性が充実して生きることを実現しようという理念」⁽⁴⁸⁾を提示する発想があり、そうした思想の代表者がカーライルであるとトレルチは論じる。

ここからそのような社会主義は近代の質的個人主義ととても密接に結びついて社会貴族主義になりうる。(中略)このような側面から見ると、社会主義と並んで、英雄主義の新たに基礎付けられた理念が姿を現す。これもまた19世紀の精神に対する文化批判的反動であり、カーライルがその世界的に有名な指導者である。英雄主義のエートスはあらゆる領域で、単なる大衆的不正である自然主義や単なる商業道德である功利主義に対立し、同様に、デモクラシーと資本主義にも、審美的かつ観想的自己満足にも、創造的行為の福音として対立する⁽⁴⁹⁾。

ここでもカーライルに対して直接的な賛意が表明されているわけではない。しかし、第一次世界大戦後に自らの立場を貴族主義的＝保守主義的社会主義と規定するトレルチにとって⁽⁵⁰⁾、ここで描き出されたカーライルの社会思想は縁遠いものではないはずである。

ただし、トレルチは「英雄主義」を肯定することはなかったように思われる。「英雄主義」に対する慎重な姿勢の理由を、晩年の著作『歴史主義とその諸問題』⁽⁵¹⁾の中に探ることができる。この著書でも数か所でカーライルの名前が確認できるが、歴史に関する著述の例として挙げられているのみで、詳細な議論を展開する対象とはされていない。その理由の一つは、徹底した歴史主義者であるトレルチの歴史観と、変わりゆく歴史現象の内奥に変わらない核心を認めるカーライルの歴史観との根本的な相違にあると思われる⁽⁵²⁾。さらに別の理由として、「偉大な人々」(Die „großen Männer“)に関す

るトレルチの考え方も想定できる。トレルチは歴史上の「偉大な人々」について以下のように述べる。

「偉大な人々」、あるいは人々がそうした人間を呼ぶ呼び方に従って言えば「傑出した人々」は、いずれにせよ集合点であり頂点である。彼らが遂行した創造的総合は、彼らが直接的あるいは間接的に創造したさまざまな制度や精神的勢力の中に造形力としてつきささっている。事実その通りであることは、歴史のあらゆる研究が反駁できない仕方であっているところである。しかしこれは決して因果概念を止揚しはしない。というのは、これらすべてはまさしくあらゆる種類の条件や原因の衝撃や結合の下に起るからである。追感しながら研究する研究者は、因果的経過全体を自ら自分の中に追体験することができる⁽⁵³⁾。

トレルチは「偉大な人々」の業績を否定しない。しかし、そこにも他の人々を取り巻くものと同じ歴史的な因果関係が存在しており、「偉大な人々」の成した事柄も、歴史家の仕事によって追体験が可能なのである。つまり、トレルチにとって「偉大な人々」は崇拜の対象ではなく、理解すべき対象である。その理解は、各個人それぞれの人格の創造力を触発するだろう。「偉大な人々」についてのこのような議論は、ブセツトやバウムガルテンによって単純化してまとめられていたカーライルの〈英雄崇拜〉に対する反論になるものである。ただし、本稿で確認したように、カーライルは英雄とその他の大衆の質的差異を一面的に主張していただけではなく、プロテスタント的〈英雄崇拜〉においてはあらゆる人間が英雄になれる可能性が説かれていた。そのことを思い起こすと、〈英雄崇拜〉に関してトレルチは、おそらくは自分で意識することなく、ブセツトやバウムガルテンよりもカーライルに近い位置にいたと言えるかもしれない。

7. ドイツ自由主義神学におけるカーライルの ねじれた受容

カーライルからの影響がハルナックの思想とリッチェルの思想を区別するメルクマールとなっていたように、カーライルに対する態度は宗教史学派のメンバーとしてまとめられることの多いブセットとトレルチの間の差異を明確化する。他方でブセットは、カーライルを積極的に評価するという点ではハルナックやバウムガルテンと共通するものの、歴史の中に変わらない核心が存在するという歴史観は彼らと共有していない。ここには、歴史の流動性を厳しく見据える宗教史学派の思考態度が反映しているものと思われる⁽⁵⁴⁾。以上のように、カーライルをどのように受容したかに注目することで、リッチェル学派と宗教史学派の対立という定型的な図式よりも繊細に神学者たちの布置を描くことができる。これは、ドイツ自由主義神学研究においてカーライルに注目することの意義である。

本稿で確認した神学者たちについて振り返ってみると、ハルナックはカーライルの〈衣装の哲学〉からキリスト教史の基礎的な枠組みを受け取っていた。ブセットはカーライルの〈英雄崇拜〉を自分の生きる時代における指導者の待望に結びつけるのみならず、新約聖書研究にも援用していたようである。バウムガルテンは〈衣装の哲学〉を基に教会の現状への危機感を述べた上で、イエスに対する〈英雄崇拜〉によりキリスト教的共同体を再建する希望を表明していた。このように、カーライルはドイツの自由主義神学の様々な領域でインスピレーションの源となっていた。

ただし、〈衣装の哲学〉はともかく、カーライルの〈英雄崇拜〉はブセットにしてもバウムガルテンにしてもかなり単純化されて受容されていた。そのように単純化された英雄論に対して批判的な距離を保っていたトレルチの方がむしろ、カーライル自身の〈英雄崇拜〉論に近かった。その点では、ドイツ自由主義神学におけるカーライルの受容はねじれを孕んだものであった。

* 本稿は、日本基督教学会第 71 回学術大会 (2023 年 9 月 6 日、上智大学) で
の口頭発表を大幅に加筆修正したものです。

* 本研究は JSPS 科研費 JP18K12217 の助成を受けたものです。

文献

(一次文献)

- Thomas Carlyle, *Sartor Resartus (The Works of Thomas Carlyle in thirty volumes, vol. 1)*, C. Scribner's (New York), 1905; カーライル著、宇山直亮訳『カーライル選集 1 衣服の哲学』日本教文社、1962 年。
- Ders., *On heroes, hero-worship, and the heroic in history, (The Works of Thomas Carlyle in thirty volumes, vol. 5)*, C. Scribner's (New York), 1901; カーライル著、入江勇起男訳『カーライル選集 2 英雄と英雄崇拜』日本教文社、1962 年。
- Adolf von Harnack, *Das Wesen des Christentums*, hrsg. und kommentiert von Trutz Rendtorff, Gütersloh; ハルナック著、山谷省吾訳『基督教の本質』岩波文庫、1939 年。
- Otto Baumgarten, *Carlyle und Goethe*, J. C. B. Mohr (Tübingen), 1906.
- Ders., "[Art.] Carlyle", Thomas, in: RGG¹, Sp. 1578-1586.
- Ders., "[Art.] Carlyle", Thomas, in: RGG², Sp. 1462-1463.
- Wilhelm Bousset, „Thomas Carlyle. Ein Prophet des neunzehnten Jahrhunderts“, in: *Die Christliche Welt* (11), 1897, Sp. 249-253, 267-271, 296-299, 324-327.
- Ders., *Kyrios Christos. Geschichte des Christusglaubens von den Anfängen des Christentums bis Irenaeus*, Vandenhoeck & Ruprecht (Göttingen), 1913.
- Ernst Troeltsch, „Die „kleine Göttinger Fakultät“ von 1890“, in: *Die Christliche Welt* (34), 1920, Sp. 281-283; トレルチ著、荒木康彦訳「一八九〇年の『ゲッティンゲン小教授団』」、トレルチ著、荒木康彦訳『私の著書』創元社、1982 年、45-54 頁。
- Ders., *Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen (1912)*, 3 Bde., De Gruyter (Berlin/ Boston), 2021 (= *Kritische Gesamtausgabe*, Bd. 9.1, 9.2, und 9.3).
- Ders., „Was heißt »Wesen des Christentums«?“, in: Ernst Troeltsch, *Zur religiöse Lage, Religionsphilosophie und Ethik*, J. C. B. Mohr (Paul Siebeck; Tübingen) 1913 (= *Gesammelte Schriften II*), S. 386-451; トレルチ著、高森昭訳「『キリスト教の本質』とは何か」『トレルチ著作集 2 神学の方法』ヨルダン社、1986 年、37-121 頁。
- Ders., „Das Neunzehnte Jahrhundert“, in: Ernst Troeltsch, *Aufsätze zur Geistesgeschichte und Religionssoziologie*, J. C. B. Mohr (Paul Siebeck; Tübingen) 1925, (= *Gesammelte Schriften IV*), S. 614-649; 小林謙一訳「十九世紀」『トレルチ著作集 10 近代精神の本質』ヨルダン社、1981 年、195-237 頁。

Ders, *Der Historismus und seine Probleme* (1922), 2 Bde., De Gruyter (Berlin/ New York), 2008 (= *Kritische Gesamtausgabe*, Bd. 16.1 und 16.2) : 『トレルチ著作集 6 歴史主義とその諸問題 上・中・下』近藤勝彦訳、ヨルダン社、1980-1988年。

(二次文献)

Klaus Berger, *Exegese und Philosophie*, Verlag Katholisches Bibelwerk (Stuttgart), 1986.
Heinrich Kahlert, *Der Held und seine Gemeinde*, Peter Lang (Frankfurt am Main/ Bern/ New York/ Nancy), 1984.
Wolfgang Steck (Hrsg.), *Otto Baumgarten. Studien zu Leben und Werk*, Karl Wachholtz (Neumünster), 1986.
Anthonie F. Verheule, *Wilhelm Bousset. Leben und Werk*, Amsterdam, 1973.
Friedrich Wilhelm Graf, „Lex Christi und Eigengesetzlichkeit“, in: Wolfgang Steck (Hrsg.), *Otto Baumgarten. Studien zu Leben und Werk*, Karl Wachholtz (Neumünster), 1986, S. 237-285.
加納和寛『アドルフ・フォン・ハルナックにおける「信条」と「教義」』教文館、2019年。

註

- (1) 内村がカーライルに言及する箇所は数多い。代表的なところでは「後世への最大遺物」の中での「私は元来、トーマス・カーライルの本を非常に敬読する者であります」という記述が挙げられる(内村鑑三『後世への最大遺物・デンマルク国の話』岩波文庫、1946年、55頁)。まとまったカーライル論としては「月曜講演第一章 カーライルを学ぶの利と害」(『内村鑑三全集』第五卷、岩波書店、1981年、324-341頁)がある。柴田真希都によれば、内村がカーライルのクロムウェル伝を読んだことが、不敬事件の背景の一端をなしていると考えられる(柴田真希都『明治知識人としての内村鑑三 その批判的精神と普遍主義の展開』みすず書房、2016年、223頁)。また、内村自身の著作と容貌がカーライルに喩えられることもあった(J. F. ハウズ著、堤稔子訳『近代日本の預言者 内村鑑三、一八六〇-一九三〇年』教文館、2015年、218頁および396頁)。向井清は内村のカーライル受容が倫理性を重視する「狭さ」を持ったものであることを指摘している(向井清『カーライルの人生と思想』大阪教育図書、2005年、227-232頁)。
- (2) 新渡戸のもっともまとまったカーライル論は「衣服哲学講義」(『新渡戸稲造全集』第九卷、教文館、1969年、245-466頁)を参照。斎藤兆史は新渡戸がカーライルから思想的のみならず英語の文体にも影響を受けた可能性を指摘している(斎藤兆史『見つけ合う英文学と日本 カーライル、ディケンズからイシグロまで』NHK出版、

2017 年、23-36 頁)。新渡戸とカーライルにおけるキリスト教的道徳の共通点と相違点については向井、前掲書、217-227 頁を参照。

- (3) Otto Baumgarten, "[Art.] Carlyle", Thomas, in RGG¹, Sp. 1578-1586.
- (4) 『カーライルの人生と思想』14-15 頁。
- (5) 前掲書、19 頁。
- (6) 「仕立て直された仕立て屋」という意味のラテン語 *Sartor Resartus* という原題を持つこの書物は、日本語訳では『衣装の哲学』『衣服の哲学』『衣装哲学』などと呼ばれてきたが、本稿では斎藤兆史にならって『サーター・レサータス』と表記する。
- (7) Thomas Carlyle, *Sartor Resartus* (The Works of Thomas Carlyle vol. 1), C. Scribner's (New York), 1905, p. 170; カーライル著、宇山直亮訳『カーライル選集 1 衣服の哲学』日本教文社、1962 年、257 頁。本稿でのカーライルからの引用は拙訳であるが、『カーライル選集』収録の日本語訳を参考にした。
- (8) *Sartor Resartus*, pp. 178-179; 『衣服の哲学』268-269 頁。
- (9) *Sartor Resartus*, p. 172; 『衣服の哲学』259 頁。
- (10) カーライルは「衣装の哲学」というモチーフを用いて以下のように述べる：「『おそらく近代の歴史において最も注目すべき事件は』とトイフェルスドレックは言う、『ヴォルムスの会議ではなく、まして、アウステルリッツ、ワーテルロー、ピータールーの戦いや、他のどの戦いでもない。そういったものではなく、多くの歴史家が不注意にも見過ごし、他の歴史家はある程度の嘲笑とともに取り扱った事件、すなわち、ジョージ・フォックスが、自分に合う上下揃いの皮の服を作ったことである』」(*Sartor Resartus*, p. 166; 『衣服の哲学』251 頁)。
- (11) Thomas Carlyle, *On Heroes, Hero-Worship and the Heroic on History* (The Works of Thomas Carlyle vol. 5), C. Scribner's (New York), 1904, 1; カーライル著、入江勇起男訳『カーライル選集 2 英雄と英雄崇拜』日本教文社、1962 年、3 頁。
- (12) *On Heroes, Hero-Worship and the Heroic on History*, p. 123; 『英雄と英雄崇拜』177 頁。
- (13) *On Heroes, Hero-Worship and the Heroic on History*, p. 125; 『英雄と英雄崇拜』181 頁。
- (14) *On Heroes, Hero-Worship and the Heroic on History*, p. 127; 『英雄と英雄崇拜』183 頁。
- (15) Adolf von Harnack, *Das Wesen des Christentums*, hrsg. und kommentiert von Trutz Rendtorff, Gütersloh, 1999, S. 56; ハルナック著、山谷省吾訳『基督教の本質』岩波文庫、1939 年、25 頁。訳文は、ハルナックが引用しているドイツ語テキストからの拙訳。
- (16) *Sartor Resartus*, p. 219; 『衣服の哲学』330 頁。
- (17) *Das Wesen des Christentums* S. 260; 『基督教の本質』289 頁。ここで引用されているのは、*Sartor Resartus*, 154; 『衣服の哲学』230 頁。

- (18) 加納和寛『アドルフ・フォン・ハルナックにおける「信条」と「教義」』教文館、2019年、241頁。
- (19) 加藤、前掲書、236-237頁。
- (20) Anthonie F. Verheule, *Wilhelm Bousset. Leben und Werk*, Amsterdam, 1973, S. 373.
- (21) Wilhelm Bousset, Thomas Carlyle, „Ein Prophet des neunzehnten Jahrhunderts“, in: *Die Christliche Welt* (11), 1897, Sp. 249-253, 267-271, 296-299, 324-327.
- (22) Ibid., Sp. 270.
- (23) Ibid., Sp. 251; Sp. 271.
- (24) Ibid., Sp. 251.
- (25) Ibid., Sp. 253.
- (26) Ibid., Sp. 324.
- (27) Ibid., Sp. 298-299.
- (28) Ibid., Sp. 299.
- (29) Ibid., Sp. 325.
- (30) *Wilhelm Bousset. Leben und Werk*, S. 375.
- (31) Wilhelm Bousset, *Kyrios Christos. Geschichte des Christusglaubens von den Anfängen des Christentums bis Irenaeus*, Vandenhoeck & Ruprecht (Göttingen), 1913, S. 100.
- (32) Heinrich Kahlert, *Der Held und seine Gemeinde*, Peter Lang, 1984, S. 99.
- (33) Otto Baumgarten, *Kreuz und Hakenkreuz*, Leopold Klotz (Gotha), 1926.
- (34) Otto Baumgarten, *Carlyle und Goethe*, J. C. B. Mohr (Tübingen), 1906.
- (35) Otto Baumgarten, “[Art.] Carlyle”, Thomas, in: RGG², Sp. 1462-1463.
- (36) *Carlyle und Goethe*, S. 82.
- (37) Ibid., S. 84.
- (38) Ibid., S. 165-166.
- (39) Ibid., S. 168.
- (40) Ibid., S. 169.
- (41) Ibid., S. 171.
- (42) Ibid., S. 175.
- (43) Ibid., S. 175-176.
- (44) ただし、バウムガルテンのイエス像は、ナウマンの主張する「民衆の人間イエス」(Volksmann Jesus) の民主主義的特徴と、カーライルの言う最も偉大な「人間性の預言者」の貴族主義的徳の両義性を帯びていたと指摘されており、安易な単純化を許すものではない。Friedrich Wilhelm Graf, „Lex Christi und Eigengesetzlichkeit“, in: Wolfgang Steck (Hrsg.), *Otto Baumgarten. Studien zu Leben und Werk*, Karl Wachholtz (Neumünster), 1986, S. 237-285, hier S. 251.

- (45) Ernst Troeltsch, „Die „keine Göttinger Fakultät“ von 1890“, in: *Die Christliche Welt* (34), 1920, Sp. 282; トレルチ著、荒木康彦訳「一八九〇年の『ゲッティンゲン小教授団』」、『私の著書』創元社、1982年、46頁。
- (46) トレルチはブセットのカーライル論を「とても読むべき価値のある記述」だと述べている (Ernst Troeltsch, „Religionsphilosophie und principielle Theologie“, in: KGA2, S. 470)。バウムガルテンの *Carlyle und Goethe* は『社会教説』で参考文献に挙げられている (KGA9, S. 1312)。
- (47) *Kritische Gesamtausgabe*, Bd. 9.2, S. 1767–68; 『トレルチ著作集 9 プロテスタンティズムと近代世界 II』145–146頁。また、クロムウェルについての論述箇所、カーライルのクロムウェル論が参考文献に挙げられている (*Kritische Gesamtausgabe*, Bd. 9.2, S. 1481)。
- (48) *Gesammelte Schriften IV*, S. 643; 『トレルチ著作集 10 近代精神の本質』230頁。
- (49) *Gesammelte Schriften IV*, S. 643; 『トレルチ著作集 10 近代精神の本質』230頁。
- (50) トレルチの貴族主義的＝保守主義的社会主義については以下の拙論を参照：小柳敦史「エルンスト・トレルチの宗教社会主義」『基督教学研究』第41号、2022年、79–100頁。
- (51) Ernst Troeltsch, *Der Historismus und seine Probleme* (1922), 2 Bde., Berlin, 2008 (= *Kritische Gesamtausgabe*, Bd. 16.1 und 16.2); 『トレルチ著作集 6 歴史主義とその諸問題 上・中・下』近藤勝彦訳、ヨルダン社、1980–1988年。
- (52) この相違点は、ハルナックの『キリスト教の本質』に対するトレルチの批判の主要な根拠でもある。『キリスト教の本質』に対するトレルチの批判については Ernst Troeltsch, „Was heißt »Wesen des Christentums«?“, in: GS2, S. 386–451; 高森昭訳「『キリスト教の本質』とは何か」『トレルチ著作集 2 神学の方法』37–121頁。
- (53) *Der Historismus und seine Probleme*, S. 220–221; 『歴史主義とその諸問題 上』81頁。
- (54) ただし、ブセットはフリースの思想の影響で歴史の流れに左右されないアプリアリな宗教性を追究するようになる。ブセットにおいてカーライルからの影響と新フリース主義がどのように結びついていたのかは、別途集中した検討が必要である。